へ迷惑仕。先年は幅九尺餘之處、右御餌指町井御地子町之間は、漸々二・三尺程に罷成云々。との申立に付、水道幅取廣め方地子肝煎へ申付出來の由、町奉行の書簡に見ゆ、左註に、上下二筋共幅切ひろげ候由、田井之留帳に見ゆ。とありて、此の用水は水車の方と中嶋町の方との二筋なりけり。

○淺野用水橋

金澤橋梁記に、與助橋・代の橋・かなや橋、右橋々淺野町。とあり。此の用水に架けたる橋なるべし。今橋名詳かならず。

○堀遊閑舊邸

元祿六年の士帳に堀孫左衛門淺野町。とありて、堀氏數代爰に居住せりと云ふ。

○堀遊閑傳

遊閑は三郎左衛門勝周と稱し、實は與力士玉川七兵衛の長男なりしが、堀孫左衛門の壻養子と成り、享保五年家督を繼ぎ、孫左衛門と改稱し、大小將組と成り、寛保二年會所奉行、寶暦二年大小將横目と成り、同九年先手方頭を命ぜられ、明和八年大組頭に昇進し、安永六年十一月致仕し遊閑と稱す。寛政十一年九十五歳に及べり。豫て家に傳る作の鞍あり。百歳に滿ちたらば藩侯に獻呈せん事を内心に思ひ居しかど、次第に老衰して、來春の迎陽をも覺束なしとて、十一年の暮其の由を上申して獻呈せしに、參議中將治脩卿大悅し給ひ、壽齡を賀して道服に鳩杖を添へて賜はりたり。其の歌、

老の坂越え殘すなよ百とせの
　杖をたよりに春を待つべし

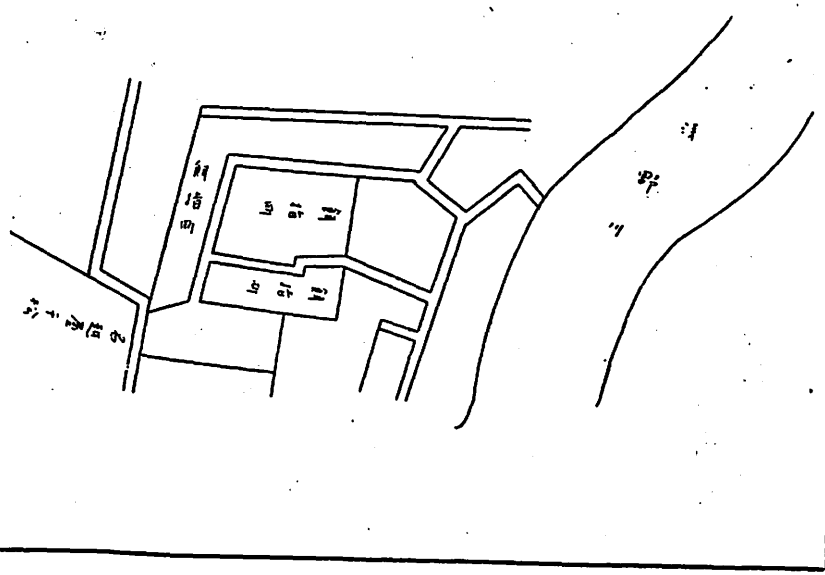
然るに翌春正月十九日に、九十六歳にて歿したりと。此の時代藩士中にての長壽なりといへり。遊閑は壯年の頃より甚だ强情の性質にて、萬事質素を專らとなしたり。江戸詰をなしたりし頃の狂歌とて、人口に膾炙する句。

朝は梅ぼし昼めしは香の物
　夜はむさいで暮す江戸詰

或は云ふ、堀遊閑は寛政十一年に九十九歳に及べり。故に同年の暮十二月下旬頃、太梁公より壽齡を賀し給うて、鳩の杖に短冊を添へて賜はりけり。その御詠歌に、百歳の杖を便りに春を待つべしとありしが、即ち百歳の春を迎へて歿せりと。今按ずるに、百歳にて歿すといふは過聞なるべし。

○餌指町

或は淺野餌指町と呼べり。改作所舊記に載せたる、元祿十一年三月淺野用水の儀に付用水下七ヶ村肝煎共連名上申書に、御餌指町と載せたり。此の時代はかく呼びたりけん。此の地は舊藩中廐方餌指共の組地にて、元は堀川古餌指町の地に居住せしかど、後此の地へ移轉を命ぜられしと云ふ。但し移轉の時代は未だ詳かならず。延寶の金澤圖に、既に此の淺野の地に餌指町と記載して、其の組地を載せたり。其の圖は下に載せたる如し。按ずるに、萬治二年小松附の賭士金澤搬宅の頃などに、移轉を命ぜられしにや。再校江戸砂子に、江戸小石川餌指町は、御廐をつとむる面々住居す。故にかくいふとあり。町名の來歴全く同じ。何方にても同事なりと聞ゆ。餌指の事は、既に堀川古餌指町の條に出せり。

○雀小屋

元祿三年の金澤火災記に、餌指町雀小屋をば燒失のヶ條に